

第 24 回 獨協大学 全国高校生 ドイツ語スピーチコンテスト 予選講評

第 24 回 獨協大学 全国高校生 ドイツ語スピーチコンテストにたくさんのご応募をいただき、まことにありがとうございました。今回の応募者数は、第 1 部 160 名、第 2 部 13 名、第 3 部 15 名、延べ 188 名となりました。このように多数の応募があったことをたいへん嬉しく思います。新型コロナウイルスの感染拡大により、いまなお生活がさまざまな制約を受ける中、今回のスピーチコンテストはドイツ語を学ぶ高校生にとって、授業以外の時間にドイツ語を練習する貴重な機会となることと思います。

第 24 回 獨協大学 全国高校生 ドイツ語スピーチコンテストは、全 3 部で構成されます。第 1 部の朗読部門は、3 種の課題テキスト、または応募者がみずから自由に選んだテキストを、朗読という形で表現するものです。以前実施していた対話形式での朗読部門については、感染予防の観点から今年度も引き続き休止しております。昨年度より新設された第 2 部のプレゼンテーション部門においては、高校生にとって身近なトピックについて、パワーポイントなどの視覚的なツールを活用しながら発表していただきます。第 3 部のフリースピーチ部門は、社会的なテーマについて独自の見解を述べるものです。

第 1 部においては、ドイツ語の発音の正確さに加えて、テキストの内容を深く理解した上での表現力が試されることとなります。今回も昨年度に引き続き応募者数がたいへん多く、激戦となりましたが、表現の面で工夫をこらしたものが多く見られました。第 2 部のプレゼンテーション部門では、今回は「私の夢の旅」というテーマを設定しましたが、主催者がこのテーマに対してもっていた期待をよい意味で裏切る独創的な作品が目立ちました。第 3 部のフリースピーチ部門には、現在の激動する社会情勢に敏感に反応するフレッシュな作品が揃いました。

このようにバリエーションに富み、個性豊かな数々の作品を一定数に絞り込むのは、われわれ予選審査員にとって非常に難しい作業でした。そのため、今回も想定していたよりも多くの作品を本選に選出することとなりました。

われわれ審査員は、すべての応募者の皆さんの勇気を祝福し、その努力に大きな敬意を表します。この講評が皆さんのさらなる成長に寄与することができれば幸いです。また、皆さんがこれからも楽しくドイツ語を学ばれ、実り多い高校生活を過ごされることを願っております。

※ 残念ながら、録音状態が万全でないものが散見されました。今後ご応募の際には、雑音の有無、録音レベルなどについて十分ご確認くださいようお願い申し上げます。

第 1 部（朗読部門）

第 1 部の課題テキストは、ロベルト・ゲルンハルト（1937-2006）の「芸術とは」、ヘルマン・ヘッセ（1877-1962）の「階段」、ハインリッヒ・ベル（1917-1985）の「働く者のやる気をそぐ話」（抜粋）の 3 作です。応募者自身が選んだテキストには、ハインリッヒ・ハイネ（1797-1956）の「歌の翼に」などがありました。

応募者にもっとも人気があったのが「芸術とは」です。聴衆に向かって語りかける講演者の言葉という珍しい形式を採った詩ですが、口語体で書かれ、語彙も比較的平易と言えます。ドイツ語学習の過程ですでに出会った表現も多く含まれていたのではないのでしょうか。そうした表現を哲学的な問答のような詩のうちに味わうことができるのもドイツ語を学ぶ醍醐味です。とはいえ „etwas am Hut haben“ や „auf den Wecker fallen“ などのやや難解な慣用表現も含まれますし、全体的に皮肉が効いて、複雑なニュアンスを含むテキストです。各節でおおむね二行ずつ韻を踏んでいることは、把握しやすかったことと思います。テキスト全体では中盤に明らかな山場があり、畳み掛けるような表現になっていますので、そこへ向けて盛り上げてゆき、終盤は穏やかな調子をもってゆくのが基本的な解釈となるでしょう。「芸術」を称揚する言葉を重ねた後、すべて嘘だとひっくり返し、さらに最後の節で「信じても差し支えない」ともう一度戻すわけですが、最後の節をどう解するかで、全体の解釈が大きく変わってきます。応募者の中でも解釈が割れている様子だったのは興味深いことでした。

「階段」は皆さんのような若者に、勇気を持って未知の世界へ歩み出すことを促す、淡々としながらも力強いテキストです。難しい語彙や、主文と副文から成る長い文の構造が多く見られ、言語的には三つのテキストの中で最も難解です。自由詩の形式で書かれており、リズムは自分で作り出さなければなりません。押韻の箇所が各節で異なりますので、節ごとに個別にリズムを整える必要があります。

ユーモアあふれる寓話「働く者のやる気をそぐ話」は、比較的平易な語彙で書かれており、日常的な表現が多く使われています。取り組みやすい反面、緩急の付け方などはかえって難しいテキストかもしれません。飄々とした調子の語り手に加えて、性急で押し付けがましい観光客、悠々とわが道をゆく漁師という対照的な二人の人物が登場するため、演技力が試されるテキストです。三役の声を使い分け、その人物の性格や雰囲気話し方で表現することで、魅力的なパフォーマンスを実現できるでしょう。

こうした表現の前提として、ドイツ語の発音が正確であるかどうかにもむろん重要な評価ポイントとなります。すべての応募者にお送りする「第 1 部予選審査用紙」には、各自が取り組むべき個々の音についてのフィードバックが記載されています。先生や教科書の助けを借りるだけでなく、インターネットでも調べてみましょう。専門的なウェブサイトとしては Sounds of Speech (<https://soundsofspeech.uiowa.edu/german>) などが有用ですが、獨協大学でも日本の学生のために発音練習用のウェブサイト (<http://phonetik.sakura.ne.jp>) を制作していますので、ぜひ参考にしてください。

第2部（プレゼンテーション部門）

第2部の今年の課題は「私の夢の旅」で、将来実現したい旅についていかに想像力豊かに、創造的に語ることができるかを問うものでした。少なくない応募者が、旅のプランの詳細に重きを置くというよりは、むしろその場所に抱く思いやその理由について多くを語っていたのは興味深いことでした。さまざまな国に移り住んできたこれまでの自分の歩み、部活で打ち込んできたスポーツ、学校で学んだ環境問題など、「旅」という一語にくくることが難しい多様な物語がありました。過去への旅を夢見る人あり、映画として旅を構成する人あり、クイズを取り入れる人あり、独創的な工夫をこらした作品も目立ちました。プレゼンテーションでは通常、序論と結論を備えた論理的な構成が高く評価されますが、今回の課題に関しては、それとはやや方向性を異にする、文学的・演劇的な構成の作品についても相応に高く評価をしています。

ドイツ語表現については、第二部では洗練されていることや高度であることが求められているわけでは必ずしもなく、これまでのドイツ語学習で習得した日常的な語彙や基礎的な文法を駆使して自己表現できる力が期待されています。

本選に向けては発音を鍛えることが重要になります。一文の中でのアクセント、リズムの滑らかさ、間の取り方、そしてもちろん個々の音の発音といったことです。表情やジェスチャーで表現を豊かにすること、さらにはパワーポイントなどの視覚的ツールのデザインや活用方法も重要になります。完成された総合的なパフォーマンスをステージ上で鑑賞できることを、たいへん楽しみにしています。

第3部（フリースピーチ部門）

社会的な問題を扱う第3部の応募作品は、例年と同様、高い水準にありました。テーマは、ロシアによるウクライナ侵攻を受けて戦争あるいは平和について思索する作品が複数あったほか、ジェンダーとセクシュアリティ、環境問題、教育、医療、音楽、ファッションなど、多岐にわたりました。

多くの応募者が自分自身の経験に基づき、明快な論旨で論述を行っていました。審査員が重視した点は、提示する問題を一方的に検討することに留まらず、問題の解決に向けて明確な方向性を示したり、問題を多様な視点から照らし出したりしているかどうかです。あるいは、自身の主張を裏付けるのに適した事実が選ばれているか、それが信頼できるソースから採られているか、適切に引用されているかといったことも、説得力に影響します。自身の意見が明確に述べられていなかったり、論拠が示されていなかったり、事実の羅列に終わっていたりする作品は、独自性が十分でないといわれます。社会的な視点を含まず、個人的な問題に終始している場合は、たとえ言語的に優れていても評価は限定的になります。明確な構成をもち、各部分が相互に関連し合い、全体として「まとまりのある」印象を与える作品が、本選に相応しいものと評価されます。

言語的な構成に関しては、ネイティブチェックは文法的な誤りに限定されるべきである点をいま一度確認したいと思います。ネイティブスピーカーが手を入れていないとわかるテキストが、その点によって不利になることはありません。例年どおり、自身がもっている言語的な手段を可能な限り駆使して、自分の考えを相手に伝えられる文章を自ら書くことを推奨したいと思います。

予選を突破したスピーチがステージ上でどのようなインパクトを与えてくれるのか、その後の質疑応答も含めてたいへん楽しみです。